



「研修便り」は、高知市立学校教職員研修の成果・内容の共有、研究所から発信する情報の周知を目的として、発行していきます。

平成28年度 第1回研究主任研修会

日時：平成28年5月9日（月）実施
対象：平成28年度高知市立小・中・義務教育・
特別支援学校の研究主任

目的 学校教育目標の具現化をめざした校内研修の意義や校内研修体制の確立・校内研修の在り方について協議し、研究主任としての力量を高める。

「研究主任の役割、校内研究の意義及び研究推進の要件について」

講師：大阪教育大学 木原 俊行 教授

校内研究の意義

子どもの学力向上（教員の授業力向上）のために、
教師同士の学び合いを一層充実させる



授業を対象にして、
みんなのアイデアや技を
出し合い検討することで、
授業づくりのアイデアの
共有を実現する

★校内研修の活性化のために★

- 研究テーマの設定…… 実践に共通性と多様性が生まれるようなテーマを設定する
（例えば、研究テーマに関する共通のテキストとして文科省の資料などを用いる、研究テーマに沿って実践するために手立てとなる大きな4～5つの視点を提示し、選んでもらう。）
- 研究テーマの可視化…… 研究テーマを共通認識しやすい形にする（例えば、「〇カ条」や「〇〇の学び方」など）
- 部会等の構成…… 授業づくりに関するグループを固定化せず、多様化できないかを考える
- 研究計画の策定…… 前年度より工夫した点、改善した点はあるか（スタート時期を早く設定しているかなど）を確認する
- 講師の活用…… 講師に研究の形成的評価者の役割を担ってもらう
- 書く活動…… 自分たちの頑張っている様子を書く活動を通じて可視化、共有化し、それを再度教材として用いる
- 校外との連携…… 研究推進のための連携方法や連携のパートナーの多様化、研究推進組織のネットワーク化

《研究授業に求められるもの》

- 少しチャレンジ性のある展開・教材研究
- 教科書の内容を超えた部分があると教師の学び合いが豊かになる



- 各自が研究授業を見て「自分化」する
（自分の授業にどう生かすか）
- 協議内容を焦点化する
（前回の研究授業の課題とのつながりはどうか）

各校の研究計画から

「早いスタートが実現しており、研究の推進がうかがえる！」

- 4月4日に模擬授業、22日に講師を招聘し全校授業研究の実施
- 研究主任自らが、研究の方向性を示すために4月に研究授業実施
- 8月には次年度の研究主題等について検討開始



代表研究主任による意見交流

「校内研修の活性化に向けた要点」について、代表5校が報告

この「代表5校の実践交流」から
見えたキーワードは『つながり』

授業研究と日々の授業、授業研究
と次の授業研究、学校の教職員・児童生徒同士等、
さまざまな『つながり』を大切に校内研究を推進していく

つながり

夏季校内研修のおすすめ

- 研究テーマに基づいた実践レポートを一人1枚ずつ出し合う
- お互いの実践を比べることで取り入れたいことが見えてくる
- 見直しも図れて、PDCAサイクルにも役立つ



受講者の感想

- 焦点化することが大切である。今後は、部会の構成について異学年、異教科、異年齢を考慮し、3・4名のグループをつくり、そのメンバーで授業研究に向けて活動したい。
- 本校と同じ研究形態をとっている学校とも交流ができ、ブロック研究の在り方、全校で公開授業をする際のアドバイスなどもいただき、とても参考になり、前が少し開けたように思えた。外部の方からも評価をいただいて授業づくりを高めていくということも踏まえ、これからの研究授業をどう進めていくか、また、教員同士でしっかりとつながって、子どもたちに返していくことを意識して研究を進めていきたい。

研修Ⅰ【講義】「今求められる学力と授業のあり方」

講師: 京都大学大学院 石井 英真 准教授

新しい学力・能力をめざす現代日本の教育課程の展開

次期学習指導要領改訂におけるキーワード

- ・ 学力観:「活用」「思考・判断・表現」 → 「コンピテンシー」「資質・能力」
- ・ 授業観:「言語活動の充実」 → 「アクティブ・ラーニング」
- ・ 評価観:「パフォーマンス評価」



☆ 内容ベース(何を教えるか)から、コンピテンシー・ベース(何ができるようになるか)のカリキュラムへ。

用語解説

コンピテンシー

単なる知識・技能ではない汎用的なスキル(問題解決、倫理的思考、コミュニケーション、意欲など)を示す
実社会・実生活の複雑な課題に対応することができる力

アクティブ・ラーニング

課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習

パフォーマンス評価

思考する必然性のある場面で生み出される学習者の振る舞いや作品(パフォーマンス)を手がかりに、概念の意味理解や知識・技能の総合的な活用力を質的に評価する方法



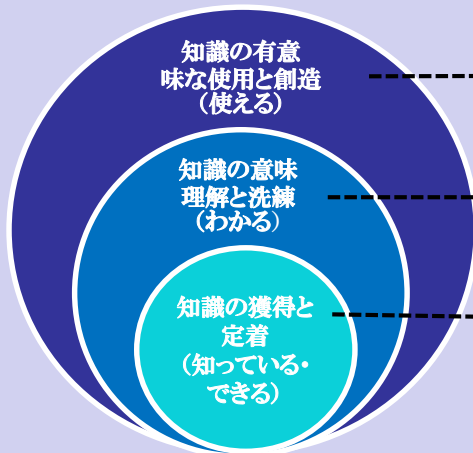
次期学習指導要領は、知識の量を重視するのではなく、学んだことを活用し周囲とコミュニケーションをとりながら社会で活躍できる、社会をよりよく生きるための資質・能力の育成に重点を置いています。

単元や学期の節目で折に触れて「使える」レベルの課題に取り組むとともに、日々の授業では「わかる」授業を追求し、学力・学習の質的レベルに応じて、評価規準の設定や評価のタイミングを工夫していくことがコンピテンシー・ベースのカリキュラムのなかで重要になってくる。

めざす学力・学習の質(教育目標の認知レベル)の明確化

学力・学習の質と評価方法

評価方法の選択



真正の文脈における活動や作品に基づく評価(狭義のパフォーマンス評価)
(例) 情報過多の複雑な文章題、小論文、レポート、作品制作・発表、パフォーマンス課題とルーブリックなど

知識表象や思考プロセスの表現に基づく評価
(例) 描画法、概念地図法、感情曲線、簡単な論述問題や文章題など

客観テスト
(例) 多肢選択問題、空所補充問題、組み合わせ問題、単純な実技テストなど

内容の習得をめざすなかでの思考力と、学んだことをつなぎあわせて文脈に対応して使われる思考力とのレベルの違いを認識しておく必要がある。

日々の「わかる」授業を構想するポイント

- ① 毎時間のメインターゲットを一つに絞る。
- ② 「目標と評価の一体化」を意識して、具体的な生徒の姿(授業後に子どもに生じさせたい変化(行動、言葉、作品など))で目標を明確にイメージする。授業の「まとめ」を子どもの言葉でイメージするのも一案。
- ③ メインターゲットについて、それを子どもたち自身につかませるような思考し表現する機会(子どもたちが協働的に活動したり議論したり思考過程をノートに残したりする場面)を設定する。
- ④ ③を授業の山場に置いて一時間の授業のストーリーをシンプルに組み立てる。
- ⑤ 思考し表現する活動を本時の形成的評価のポイントとしても意識する。
- ⑥ 計画は計画すること自体に意味があるのであり、教師の想定する「まとめ」を越える学習が出てくることをめざす。

※ 「目標と評価の一体化」と「ドラマとしての授業」とをつなぐ

【受講者の感想】

「今までは、学びが学校と社会の間で切れていた」、「これから学校と社会をつなぐために社会で求められている能力を育てていく」という言葉が、とても印象に残った。思考したくなる、またその必然性をもたせる教材研究、ICTの効果的な使用法と対するローテクの指導法の上手な使い分けなど、たくさん研究すべき課題があることに気付いた。